発行者　千葉大学大学院人文社会科学研究科

Vol. 25&26

人社研 Newsletter

2010（H22）年度
後半期博士学位取得
（社会文化科学研究科及び
人文社会科学研究科後期課程）

2011（H23）年度
前半期博士学位取得
（社会文化科学研究科及び
人文社会科学研究科後期課程）

目次

巻頭辞　2
2010年度後半期及び2011年度前半期学位授与式　3
2011年度新規科目担当者　4
科学研究費（新規)プロジェクト　5
所属教員による出版物　6
博士後期課程大学院生の研究業績　6

人文社会科学の課題

人文社会科学研究科長　　中川　裕
（兼・社会文化科学研究科長）

2011年度は震災後の混乱とその収拾の過程から始まりました。直接被害にあわれた方々の直面した苦難はもとより、千葉大学においても計画停電、授業日程の変更、猛暑下における節電の要請など、研究・学習活動における困難を全員が味わうことになりました。加えて、震災の影響で図書館の改築工事が長引くことになり、余震と放射能の影響による不安感も常に我々のまわりを取り巻き、学習環境としては過去最悪の環境にあったと言ってよいでしょう。その状況下で、多くの院生が博士論文、修士論文を書き上げて修了証書を受け取ることができました。その努力と彼らの克己心をあらためて讃えたいと思います。

しかし、それ以外にも我々が直面している様々な問題があります。そのひとつは、理高文低と称されている文系領域への進路希望者の減少傾向で、不況の続く中、就職により有利だと考えられている理系への進学希望者が増え、文系の受験者が減少しているという状況です。これは2012年度の文学部、およびこの人社研の入学志願者数にも如実に反映されています。

このような状況を鑑みて、我々は人文社会科学の課題についてあらためて考えてみる必要があるでしょう。つまり、人文社会科学を学ぶということは、どういう意味を持つのかということを。もちろん、人文科学と社会科学では、その学問領域と実社会との関わり方が違うとはいえますが、理系の学問に比して考えれば、そこには大きな共通点があります。それは、人間の営みについて探究する分野であるということです。法律、経済、哲学、心理、歴史、社会、文学、文化…。そのような様々な分野の目的とするところはひとつ―人間とはどのように考え、行動する存在であるのかということです。

そこで追及される真理は、理系の学問のように、公理や定理、法則や数式の形で形式化できるようなものとは限りません。いや、むしろ極めて曖昧で不定的な形でしかとらえられないものが大半かもしれません。しかし、それだから意味が無いということにはなりません。それが人間の活動の本質を反映したものであるとすればです。

では、その人文社会科学の諸分野における真理を追究することが、結局何の役にたつのでしょう。それはひとつには、人間がどうしたら幸福に暮らせるかということにつながるいくつかの道筋をみつけることにある、ということになるでしょう。技術の革新、医学の進歩等は、たしかに人間の幸福に寄与する可能性をもたらすものです。しかし、それらが直接人間の幸福感につながるものではないということは、これまでも繰り返し、様々な形で論じられてきました。今回の震災によって、日常の平穏な生活というものが、いかにかけがえの無いものであり、また、いかに簡単に失われてしまうものであるかを、多くの人が認識させられたと思います。経済復興、情報を共有するためのネットワークの問題、離散したコミュニティの再生、災害の際の言語コミュニケーションの問題等々、社会科学、人文科学の研究者が、これまでの研究の蓄積を駆使して解決すべき問題が、さまざまな形で顕わになってきました。反原発の立場で活発な活動を行っている人たちの中には、大江健三郎のような文学者もいます。

我々にはそれぞれの立場からやるべきことがたくさんあります。そうした問題意識を常に心の中に置きつつ、自らの目指した分野の問題に取り組んでいくことが、これからの人文社会科学にますます求められていくことだと考えますし、何のための学問か、その問いに答えるという課題に真摯に取り組むことこそが、人文社会科学の活性化につながる道だろうと思います。

2010（H22）年度後半期学位授与式および修了者祝賀会

2011年3月25日、 **文学部棟2階203講義室**において学位授与式が行われ、以下に掲載する2名の方が社会文化科学研究科を修了して学位（博士）を、７名の方が人文社会科学研究科博士後期課程を修了して学位（博士）を、1名の方が論文提出により学位(博士)を、59名の方が人文社会科学研究科博士前期課程を修了して学位（修士）を取得されました。

また、学位授与式後、人文社会科学系総合研究棟4階の千葉大学生活協同組合カフェテリアにおいて修了祝賀会が催されました（右写真）。

2010年度後半期社会文化科学研究科修了者（2011年3月）

氏名	博士論文題名	取得学位
田村雅史	契約締結上の過失に関する一考察－諸国の立法・判例から中国法への示唆－	博士（文学）
薩仁高娃	内モンゴル・ホルチン地方におけるシャマニズムの文化人類学的研究	博士（学術）

2010年度後半期人文社会科学研究科後期課程修了者（2011年3月）

氏名	博士論文題名	取得学位
日高博敬	規則のパラドックスについて	博士（文学）
安　貞美	メディアにおける移住女性の表象―韓国・フィリピンを中心に	博士（学術）
内田健介	モスクワ芸術座の『桜の園』―演出家スタニスラフスキーと作家チェーホフ―	博士（文学）
魏　倩	労働者のプライバシーに関する法的研究―日本・アメリカ・中国の比較	博士（法学）
斉　海山	アジア諸国の多様性と経済統合―概念整理とその実証分析	博士（経済学）
陳　燕燕	近代中国における外国文化の受容とジェンダー―20世紀初期から20年代における外国理論の翻訳と女性像の変化をめぐって―	博士（文学）
朴　銀姫	越境文学のリゾーム性―朝鮮の日本語作家金史良をめぐって	博士（文学）

2010年度後半期人文社会科学研究科論文提出による学位取得者（2011年3月）

氏名	博士論文題名	取得学位
大場美和子	内的場面と接触場面における三者自由会話への参加の調整―談話・情報・言語ホストの役割の分析―	博士（学術）

人文社会科学研究科博士前期課程学位（修士）取得者（2011年3月）

芳永桜香	張　玲	社本　歩	蔣　萌	金　研
松葉ひろ美	田中鹿乃子	唐　晶晶	千葉いずみ	矢野裕之
孟克巴図	東山英治	田　美蘭	吉田浩平	木其尔
中澤　結	中里由佳絵	劉　思堅	ｶﾞﾝﾎﾞﾙﾄﾞ ｿﾞﾙｻﾞﾔ	牧野公貴
松下祐実	渡邉悠三	金　雪英	武藤沙羅	張　基福
神崎雅好	ﾞﾙｼﾞｺﾞﾁﾖｰ サﾗﾝｹﾞﾚﾙ	山下祥広	施　恒文	押尾高志
俵　邦昭	李　惠英	福原正人	坂田みほ子	徳本和也
佐藤　純一	丸島忠夫	中原由莉耶	市川　憲一	千葉香一
米井　暢成	七海　悠	伊藤紗耶	片岡雄彦	青木寛子
野村　嗣	大北　碧	朴　東輝	王　大靭	渡辺　浩平
加賀沙智美	松本宗明	権　国臣	枝川千里	久保田雅子
横田智也	張　煜	小畠絵里子	阪田祥章	

2011（H23）年度前半期学位授与式および修了者祝賀会

2011年9月28日、けやき会館において学位授与式が行われ、以下に掲載する2名の方が社会文化科学研究科を修了して学位（博士）を、4名の方が人文社会科学研究科博士後期課程を修了して学位（博士）を、2名の方が人文社会科学研究科博士前期課程を修了して学位（修士）を取得されました。

また、学位授与式後、人文社会科学系総合研究棟4階の共同研究室2において修了祝賀会が催されました（右写真）。

2011年度前半期社会文化科学研究科博士後期課程修了者（2011年9月）

氏　　名	論　文　表　題	取得学位
木村智哉	「革新」と「拡散」 －日本におけるアニメーションの変容に関する文化思想史的考察－	博士（文学）
藤方博之	近世武家社会と大名家臣の「家」	博士（文学）

2011年度前半期人文社会科学研究科博士後期課程修了者（2011年9月）

氏　　名	論文表題	取得学位
木村典弘	組織形態と技能形成－アーキテクチャ論の視角から－	博士（経済学）
丸井敬司	千葉氏における妙見信仰の表象的研究について	博士（文学）
馬上丈司	再生可能エネルギー政策における地方自治体の役割に関する研究	博士（公共学）
黄　成湘	「の」による格助詞の連体関係への転換に関する研究	博士（文学）

2011年度前半期人文社会科学研究科博士前期課程修了者（2011年9月）

小林弘典	米村志朗

2011（H23）年度前半期新規科目担当者

2011年度前半期の人文社会科学研究科新規科目担当者は以下の通りです。

課程	専攻	研究教育分野	職名	氏名	科目名
博士前期課程	地域文化形成	地域スポーツ	准教授	小泉佳右	運動処方論 運動処方論演習
博士前期課程	公共研究	公共思想制度	講師	五十嵐誠一	国際関係論 国際関係論演習
博士前期課程	社会科学研究	経済理論・政策学	教授	橘　永久	実証開発経済学 資源経済学
博士前期課程	社会科学研究	経済理論・政策学	准教授	斎藤裕美	医療経済学Ⅰ 医療経済学Ⅱ
博士後期課程	公共研究	公共教育	教授	羽間京子	非行・虐待臨床論
博士後期課程	公共研究	公共教育	准教授	小泉佳右	生涯健康運動論
博士後期課程	文化科学研究	比較言語文化	教授	田中　慎	言語情報論

2011（H23）年度科学研究費新規プロジェクト

2010年度の新規採択は以下の通りです。
1）代表者名
2）2011年度予算額（単位は円。括弧内は間接経費を内数で示す。）

専任教員

基盤研究（B）一般
「アイヌ語鵡川方言の音声資料による記述的研究」
1）中川　裕教授
2）5,200,000（1,200,000)

基盤研究（C）一般
「戦間期アメリカのアジア・太平洋秩序形成をめぐる国際的非政府組織と国務省の関係」
1）高光佳絵助教
2）1,040,000（240,000)

兼担教員

基盤研究（B）一般　発話単位アノテーションに基づく対話の認知・伝達融合モデルの構築
（傳　康晴文学部教授）
基盤研究（B）一般　修復的司法から修復的正義へ―理論と実証のクロスロード―
（松村良之法経学部教授）
基盤研究（C）一般　オスマン帝国における教育の連続性と変化（19世紀～20世紀初頭）
（秋葉　淳文学部准教授）
基盤研究（C）一般　印欧語における非人称受動表現の比較研究
（石井正人文学部教授）
基盤研究（C）一般　「個人化・私化・心理化」論の展開-社会概念の再構築を目指して
（片桐雅隆文学部教授）
基盤研究（C）一般　ローマ帝政後期の政治と宗教
（保坂高殿文学部教授）
基盤研究（C）一般　戦後日本における家業経営の変容と展開に関する社会学的研究
（米村千代文学部教授）
基盤研究（C）一般　社会的認知能力の個人差とその神経生理学的基盤に関する研究
（若林明彦文学部教授）
基盤研究（C）一般　女性労働と子育て世帯間の所得格差に関する研究
（大石亜希子法経学部教授）
基盤研究（C）一般　小売施策の影響を考慮した店舗選択行動モデルに関する基礎研究
（佐藤栄作法経学部教授）
基盤研究（C）一般　福祉政策と都市政策の統合に関する研究
（廣井良典法経学部教授）
若手研究（B）　脱社会主義化・市場経済化政策下にあるモンゴル牧畜民の都市化動因と都市適応過程
（兒玉香菜子文学部准教授）
若手研究（B）　近世における風土記の学問・受容の多角的研究
（兼岡理恵文学部准教授）
若手研究（B）　近代ロシア国家形成期における文学と風景表象
（鳥山祐介文学部准教授）
若手研究（B）　大規模空間データに対する計量手法の開発とその応用
（各務和彦法経学部准教授）
若手研究（B）　トランスナショナル市民社会による「オルターナティブな地域主義」の比較研究
（五十嵐誠一法経学部講師）

2011年1～12月
人文社会科学研究科所属教員（兼担教員を含む）による出版物

柳澤　清一　北方考古学の新展開
－火山灰・蕨手刀をめぐる通説編年の見直しと精密化－
六一書房　　2011年5月　B5版　400頁

北方編年研究の地平に新展開を拓く

前著『北方考古学の新地平』（2008年、六一書房刊）の続編として、その後に発表した論文７篇と、新たに書き下ろした論考4篇などを整理して一書にまとめた。「蕨手刀」と「火山灰」に依拠した通説の北方編年観に対して、伊茶仁ふ化場第1遺跡の発掘調査成果をふまえて土器類の精密な細分編年を構築し、前著で提案した「新北方編年体系」が北海道島のみならず、サハリン島においても矛盾なく成立することを、改めて精密に論証した。以下は、目次編成の大要である。

第1章　道北における新北方編年体系の精密化
第2章　道東・道南・道北における火山灰・蕨手刀編年の検討
第3章　道央・道南から道北へ　－島嶼編年の再検討－
第4章　北海道島からサハリン島編年を見直す

道東部の通説編年を支える「火山灰」編年の見直しや、オホーツク海沿岸の「蕨手刀」の年代を12世紀代まで下ると想定した点、あるいは、ウサクマイN遺跡のソーメン紋土器や富寿神宝が、通説の北方編年の妥当性を証明する物証とはなり得ない、と考察した点は、北方考古学や北日本古代史の分野において、これから新たな論議を呼ぶことになるであろう。

北海道島における千葉大の発掘調査はすでに8年目を迎えている。昨年度は、礼文島浜中2遺跡と中標津町鱒川第3遺跡の発掘調査を実施した。今年度も、両遺跡の発掘を継続する予定であ

2011年1～12月
博士後期課程大学院生の研究業績
（人文社会科学研究科・社会文化科学研究科）

大浦明美
◆論文
介護サービス情報の公表制度において必要な事実確認のための訪問調査」
千葉県社会福祉士会機関誌 「点と線」№.76（2011年8月）

吉沢文武
◆論文
死と不死と人生の意味――不死性要件をめぐるメッツの議論と不死に関するもう一つの解釈」
『応用倫理』第5号（2011年11月）

発行者　千葉大学大学院人文社会科学研究科
発行日　2012年3月31日　Phone/fax 043-290-3574
gshss412@ml.chiba-u.jp